季刊

直江の津

◉ かみえちごを考える ◉

通巻26号

夏号

2007

6,7,8月

信越トレイル 梨平峠道

巻頭エッセイ◉このまちのこと

春日山との暮らし方

◉ この人に学べ ◉

水戸口（みとぐち）を開けて
港に春を迎えた人

高橋達太

【カメラの眼】

貝になった男

◉ 上越市川原町

季刊 直江の津 第26号 夏号
2007—6・7・8

目　　次

■巻頭エッセイ・このまちのこと
春日山との暮らし方　丸山永美子　3

■特集
信越トレイル・梨平峠道　4

■越後国府配流800年
親鸞聖人 上越後への足跡をたどる　10

■文学の旅
貝になった男
直江津捕虜収容所事件　上坂冬子　18

■この人に学べ　高橋達太　14

■講演
可能性を求めて　高井　進　20

■カメラの眼　13

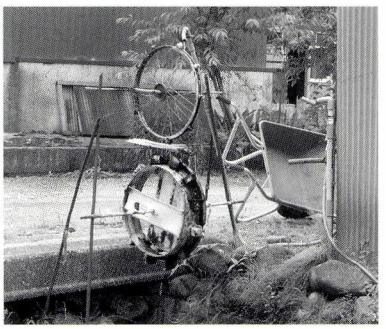
■読書びと
妻の部屋　古山高麗雄著　25

■建物さんぽ　26

■アルバムの一枚　30

■上越信用金庫 上越産業振興研究所レポート　28

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治11年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。



オブジェ　桑取にて

♣巻頭エッセイ
丸山永美子さんのこと

昭和40年上越市生まれ。
日本デザイナー学院専門学校卒。グラフィックデザイナーの後、イラストレーターに転身。
主な仕事に日本大学経済学部キャンパスニュース表紙イラスト／小川未明文学館図録／「相馬御風著　良寛さま」（復刻）イラストマップ・解説イラスト担当など、仕事先は東京・新潟県内など幅広くタッチも幅広い。
イラストマップは現場を大切にする現場主義の人として定評がある。今号の「信越トレイル・梨平峠道」のイラストマップ作成。

おしらせ　筆者松野純孝氏の都合により「親鸞の風景」を休載いたします

春日山との暮らし方

丸山永美子

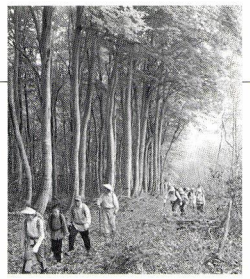
縁あって春日山の麓に住んではや十三年と数カ月。

春日山……そう、上杉謙信ゆかりの地です。上越市に生まれ育ったわたしですが、上杉謙信は授業で習うだけの存在でした。小学六年の時、千葉の従兄弟が遊びに来たので「観光気分を味わってもらおう」と、父が春日山に初めて連れて行ってくれました。その記憶の中の春日山は、鮮やかな緑色の山でしかありませんでした。そして春日山近くの地に住むようになっても、わたしにとっては縁のない山でした。ところが十年くらい前、春日山を描かねばならなくなり、詳しい方に案内して頂きました。千貫門と呼ばれるあたりは、一面にピンク色のカタクリが可憐な花を咲かせていました。まだ早春の地面は枯れ葉に埋もれていて、群生するカタクリが一そう美しく印象に残りました。それが二度目の春日山の姿でした。このとき春日山は突然、わたしの中で大きな存在感を現し始めました。カタクリをもう一度見たくて、次の年、子どもを連れて再び訪れました。しかし、今度はシャガの花に迎え入れられたのを覚えています。それからは、気分が憂鬱になると春日山、子どもとの散歩、春夏秋冬訪れる度に違う様子を見せてくれる春日山がたいそう好きになっている自分がいました。

謙信公の銅像下まで車で行ったのが、いつからか、麓の大手道から柿崎屋敷、三の丸、二の丸、天守台へと登るのが常になりました。大手道は復元されて歩きやすく、ナラの林は明るくて、春日山神社から本丸までの杉林の鬱蒼とした景色とはずいぶん趣が異なります。季節によっては、どんぐりを拾いながら、あるいは怪しいキノコを集めながら、と道中は宝物集めについ夢中になります。

避暑を兼ねて、幼児だった息子に長靴、長ズボン、ランニングシャツに麦わら帽という出で立ちで連れ出したことがあります。いかにも地元という生活感に溢れ、観光客を喜ばせました。

六月には子どもの学年行事で春日山探鳥会が予定されています。どんな鳥を発見できるのか楽しみはつきません。本丸から高田を、直江津を、頸城平野を、そして日本海を上杉謙信がかつてそうしたであろうように、見下ろしてみましょう。

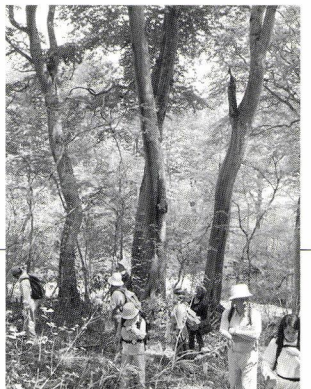




信越トレイル・梨平峠道



梨平峠道をトレッキングする人たち





市街地から関田山脈を望む

トレイルとは何？

トレイルとは、人や動物が踏み分けてできた自然の小道のことです。

信越国境の関田山脈の尾根に続くトレイルにトレッキングルートを整備しているのが「信越トレイル」です。飯山市の斑尾山から十日町市（旧松之山）の天水山までの八〇キロにわたるルートで、現在、牧峠までの五〇キロが整備されています。

七年前に信越トレッキング委員会が発足し、ルートの開発調査が行われてきましたが、平成十六年、ＮＰＯ法人信越トレイルクラブが設立され、事務局を飯山市なべくら高原・森の家（℡〇二六九－六九－二八八八）に置いて、沿線の市町村などとともに「信越トレイル」の整備・維持管理、トレッキングのガイドを行っています。

関田山脈のこと

関田山脈は斑尾山（一三八二ｍ）、から天水山（一〇八八ｍ）周辺まで続く山脈です。

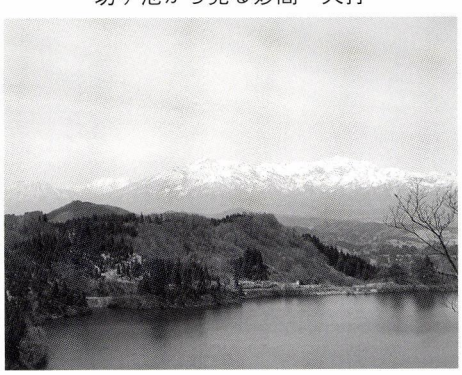
代表的な山には、鍋倉山（板倉区・一二八九ｍ）、仏ケ峰（妙高市・一一四〇ｍ）、菱ケ岳（安塚区・一一二九ｍ）などがあります。海底で堆積した土砂が七五万年前に隆起し、きわめて短時間に形成された地質学的には特異な若い山脈であり、「第四紀の地層で構成される山脈では世界一高い」と言われています。また、新潟県側の標高七〇〇メートル以上に、光ケ原のような大規模な緩斜面や大小の湖沼が点在しているのも特徴の一つです。

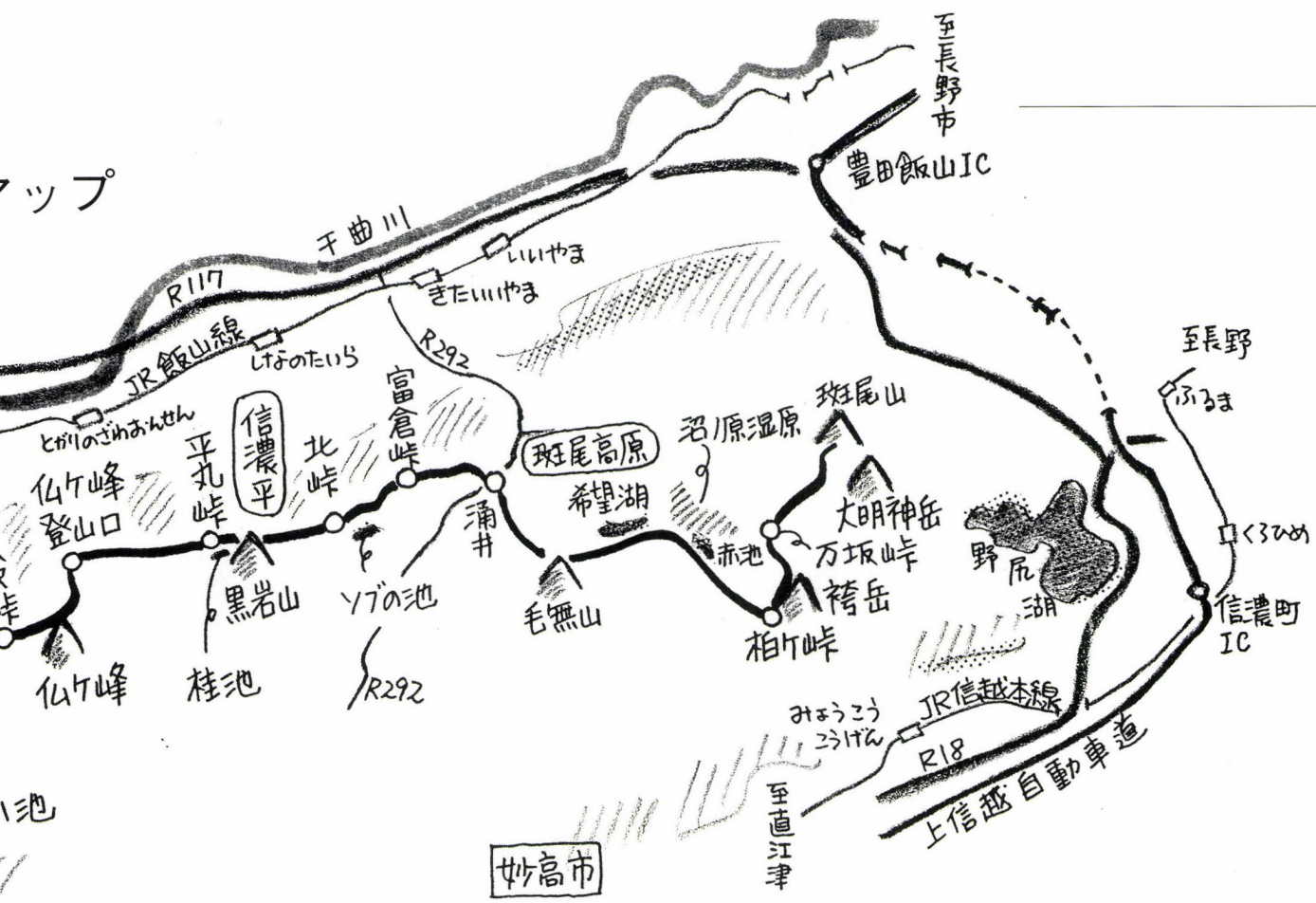
関田山脈は日本海からわずか三〇キロに位置するため、日本海の水蒸気をたっぷり含んで台風並に発達した低気圧が山脈にぶつかって大量の雪を降らせます。板倉区柄山集落では、昭和二年に八・一八メートルの積雪を記録しました。これは「人が住む場所での世界一の積雪深」といわれています。

峠道の交流

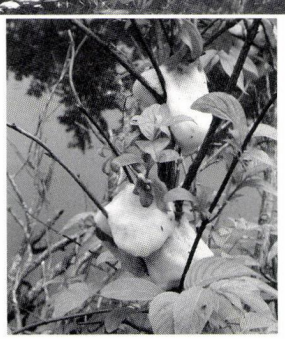
関田山脈には十六もの峠道があり、古くから越後と信濃との経済・文化の交流が盛んに行われていたことが分ります。越後からは海産物、塩など、信濃からは菜種油、紙などが牛馬によって運ばれました。また、信濃側の集落では、働き者の越後の女性を嫁にもらうことを誇りとして、大勢嫁いだと伝えられています。

坊ヶ池から見る妙高・火打









モリアオガエルの卵

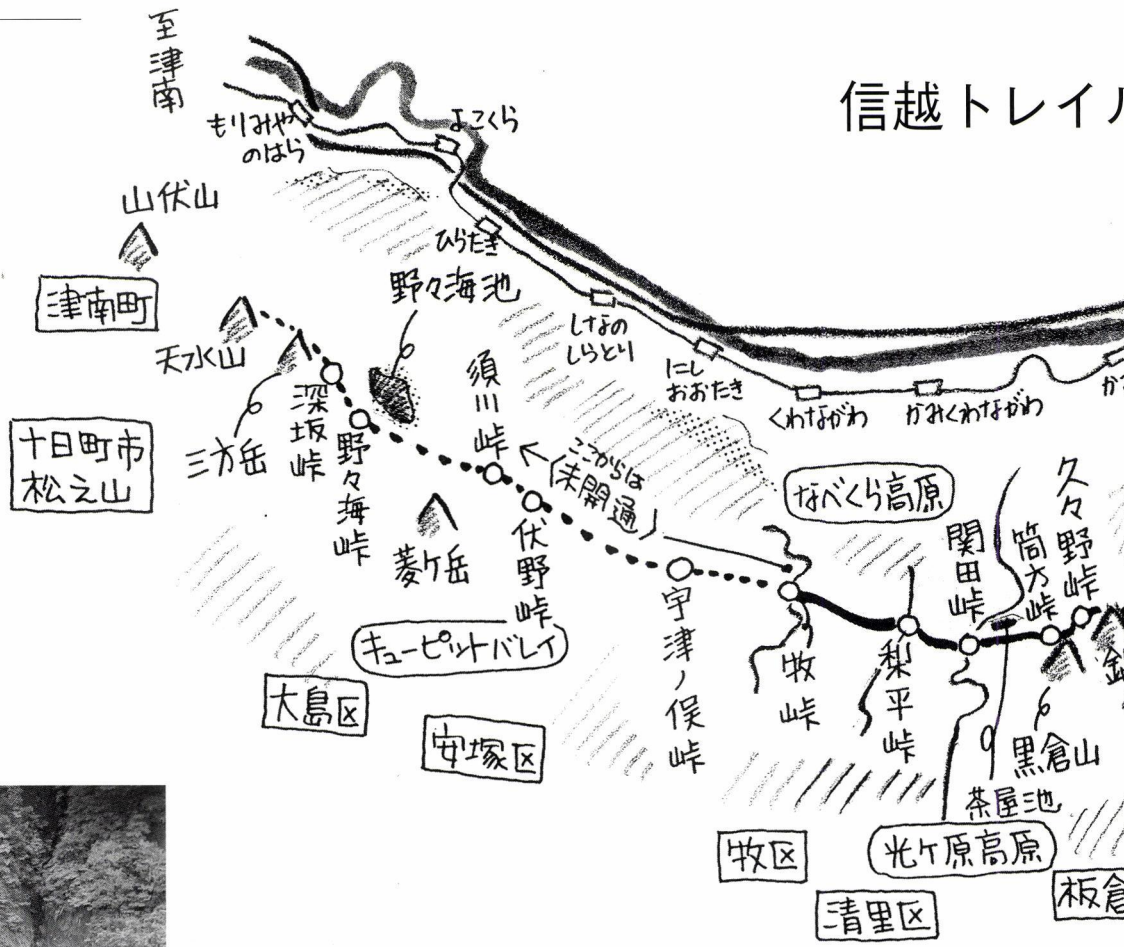
一つの街道の名前が、双方で呼び方が変わることがありますが、関田山脈の峠の名前のほとんどに、越後側の地名が付けられているのは、信州の人たちにとって越後への重要な道であったことを示しているといわれています。

これらの峠道は自動車道として広げられたり、別に道路が開削され、ほとんど昔の姿が失われてしまいましたが、清里区の梨平から飯山市羽広山へ通じる梨平峠道は、復元作業によって、かつての古道がそのままの姿で眠っていることが分りました。

関田山脈の自然

ブナやミズナラの広葉樹林の中を歩く道は、雪解けのころはマンサクやユキツバキが咲き競います。また、独特の自然環境を有してい

信越トレイル





新緑の清滝

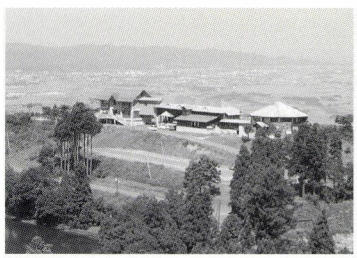


ナベクラザゼンソウ

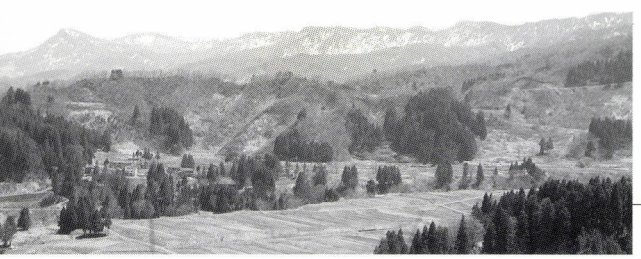


るため、ナベクラザゼンソウのように地名が付けられたもの、日照時間が短いため、太平洋側に比べて葉を大きくして「オオバ○○」と名付けられた植物も多く見られます。また、地域によっては天然記念物に指定されているモリアオガエルも生息しています。

梨平峠道マップ



山荘京ヶ岳

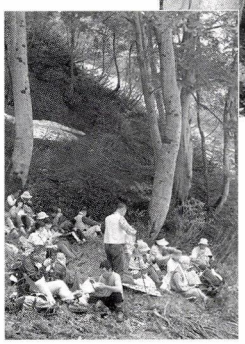


菱ヶ岳→

梨平峠→
牧峠→









若ブナの森



■清里区の取組み

十数年前から旧清里村の有志によって、信濃と越後を結ぶ古道、梨平峠道の復元が進められ、倒木を取り除き、藪を切り開いて、清滝川の源流やブナの原生林のなかを歩くトレッキングコースを整備し、平成十八年、信越トレイルと梨平峠で結ばれました。

この古道は幅二メートルもあり、戦国時代に上杉謙信の軍用道路として整備され、信濃への出陣も、これらの街道を分散して出陣したのではないかとも言われています。

清里区では、清里アメニティ研究会・清里マウントクラブの主催で、残雪期と紅葉のころに、梨平峠道から関田峠のコースをとり、山荘京ケ岳での入浴・交流会という「ブナの森ハイキング」を実施し、多くの参加者が大自然にふれ、森林浴を楽しんでいます。

資料協力　清里区総合事務所のみなさん
参考資料　信越トレイルマップ

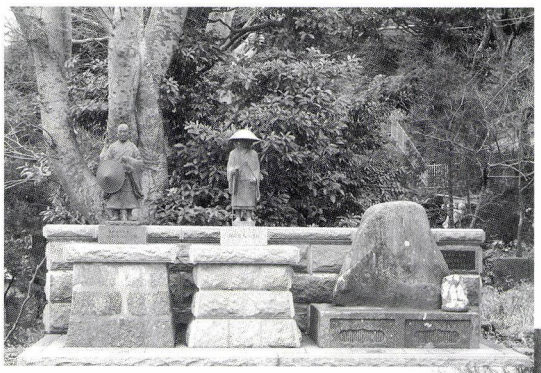
越後国府配流八〇〇年

親鸞聖人 上越後への足跡をたどる





天下の剣　親不知子不知





上　「立竦如来」を安置する外波の大雲寺
下　広い境内の西蓮寺には「船賃名号」が伝えられている

承元元年（一二〇七）二月、法然の説く専修念仏は「念仏停止」という弾圧を受ける。判決は死罪四人、流罪八人。そのうち法然上人は土佐、親鸞聖人は越後へ流罪と決まる。親鸞聖人は僧籍を剥奪されて俗人となり、妻の恵信尼を伴って配流の地である越後国府へと旅立つ。

荒波の親不知子不知

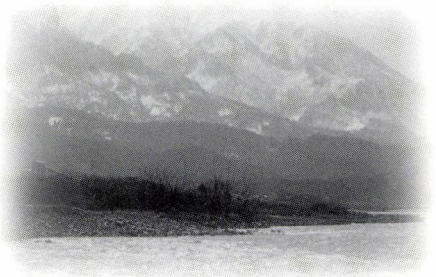
配所への旅は陸路、北陸道を歩く旅であったと伝えられている。そして最後の難所、親不知子不知の剣にさしかかる。

ここを越えれば越後である。

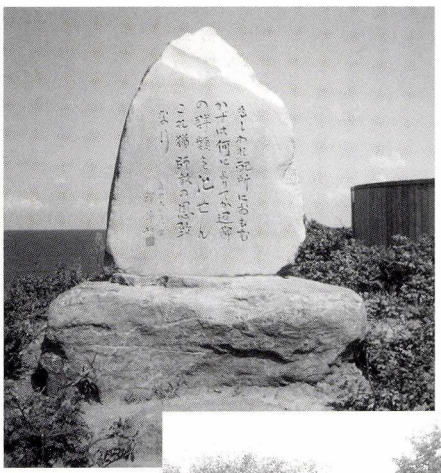
天下の難所で一行が高波に難渋していると、どこからともなく漁夫姿の少年が現れ、親鸞聖人を背負って難所を渡してくれた。少年は名を「立竦」と告げるのみで立ち去ってしまった。

少年のおかげで難所を越えた聖人は、外波の右近という家の庭石に腰をかけて休み、主人に宿を頼む。そして、自分を背負ってくれた少年のことを尋ねると、驚くことに「立竦」とは右近の妻の念持仏の名前であった。さっそく仏像を見ると裾が濡れて砂がついていた。あの漁夫姿の少年は阿弥陀如来の化身だったのである。これに驚いた夫婦は、ただちに聖人の弟子になり法名と名号を授かったと伝えられている。右近から六代目の左伝が、加賀の吉崎に蓮如上人を訪ね、大雲寺の寺号を授かったといわれ、いまも寺には「立竦如来」

増水する姫川の流れ

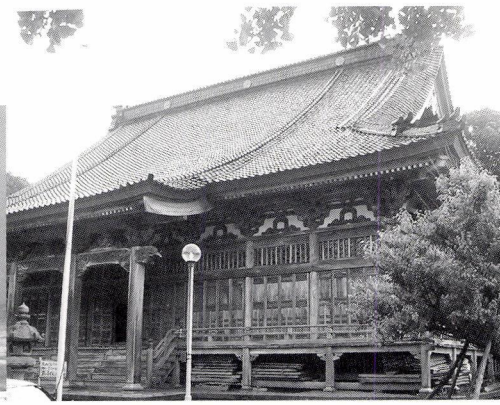


もしわれ配所におもむかずは何によりてか
辺鄙の郡類を化せん
これ猶師教の恩致なり
真宗大谷派二五世門主書
（「御伝抄」の一節）

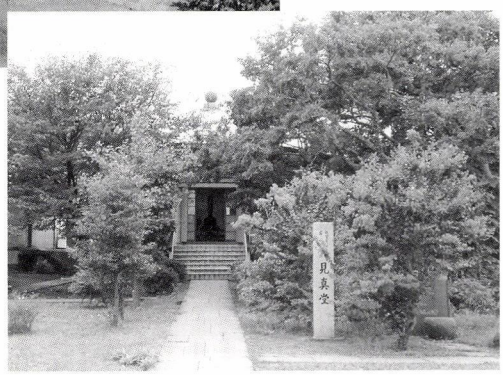




風雪が舞う居多の浜



親鸞聖人一行が乗船した木浦の浜を目の前にする西性寺



真見堂



大正14年、滋賀県彦根の寺村という人が建立、それ以来、親鸞聖人上陸の聖地、念仏発祥の地として訪れる人が絶えない。

として伝えられている。

外波を立った聖人は、雪解けで増水している姫川にさしかかる。川の流れを前に途方にくれていると、そこにいた一人の船頭が「渡してさしあげましょう」と船賃を要求してきた。しかし貯えが乏しい聖人は、船賃の代わりに名号を書いて阿弥陀如来の教えを説くと、船頭は感涙して渡してくれたという。

この名号は「船賃名号」と名づけて大切に守られていたが、おそれ多いとして西蓮寺（旧青海町田海）に寄進され、今も伝えられている。

木浦から海路　居多へ

ようやく姫川を渡った聖人一行は歩みを進め、木浦（糸魚川市木浦）の浜から船に乗り、八里の海を越えて国府の湊、郷津の「赤岩」に到着されたと伝えられている。

今、木浦の西性寺には「親鸞聖人御旧跡」の碑が建ち、目の前は日本海である。

「赤岩」で船を下りた一行は海岸を歩き、居多の浜を登って国府の役所に到着の報告をしたと伝えられてる。

鎌倉時代の国府は現在の五智国分寺周辺にあったと推定され、聖人が草庵を結んだ土地として数々の旧跡や伝承が残っている。

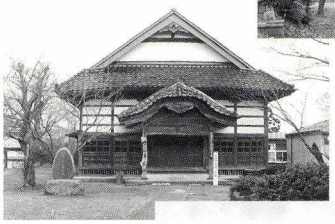
恵信尼の旅

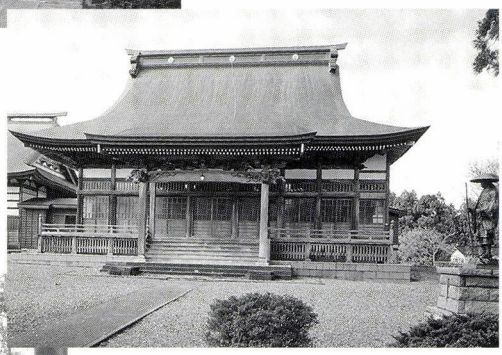
親鸞聖人は五年の流罪生活を送り、赦免後二年間この地に留まって布教したのち関東へと旅立っていく。

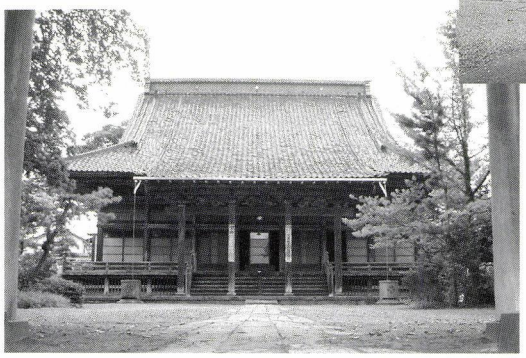


五智国分寺のたたずまい

竹之内草庵
自刻と伝えられる聖人像（市文化財）を祀る
（国分寺境内）

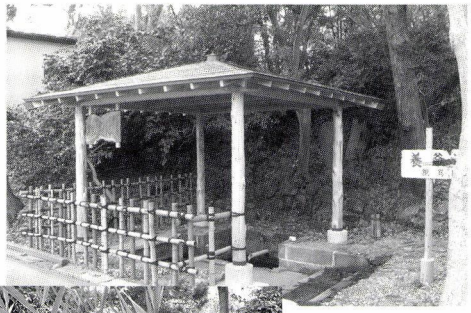






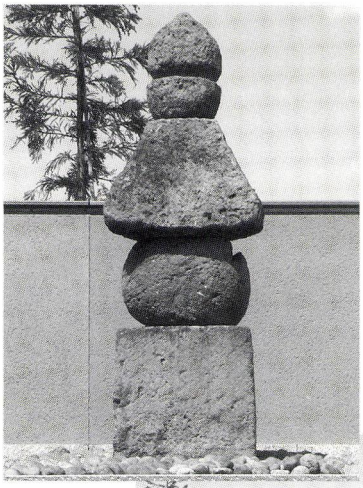
上　国府別院（市文化財）
聖人が恵信尼と暮らしたという竹之前草庵跡と伝えられる
左　光源寺
聖人が関東へ赴いた後も留まった覚円坊が開き、国府御影堂あるいは国府御坊とよばれる

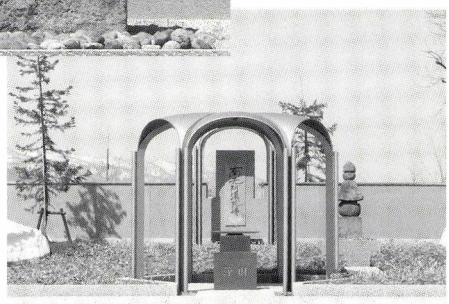
右　聖人が水を使った養爺清水
下　越後七不思議「片葉の葦」





恵信尼公寿塔





恵信尼公顕彰碑

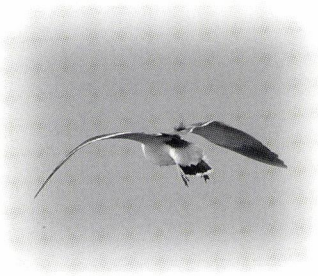
そののち一家は関東から京都に帰り、新たな布教生活が始まるが、妻の恵信尼だけは、父の三善氏の所領がある越後板倉へ戻り、所領を管理しながら都の親鸞聖人の生活を支え、孫の世話や多くの下人を使いながら生涯を閉じる。

大正時代に至って、越後に住む恵信尼から都への手紙が発見された。

遠く都と離れていても、変わることの無い聖人への信頼、子どもたちとの深い絆、下人一人ひとりへの恵信尼の思いやりが伝わる手紙であった。

その手紙に「生きているうちに七尺の五重の塔を建てたい」と書かれている五輪塔が板倉区米増で見つかり、恵信尼の寿塔として大切にされている。

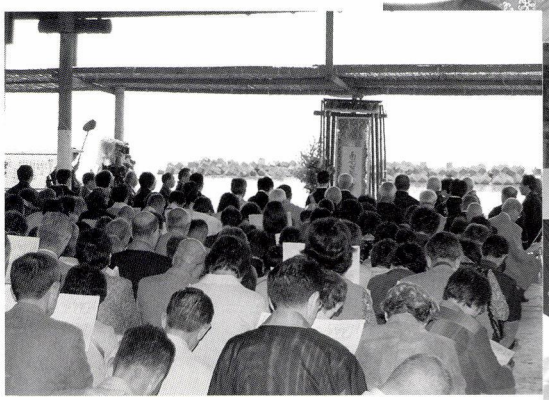
■参考「上越後の親鸞聖人」上野實英著／青海町観光パンフレット



カメラの眼

親鸞聖人配流八百年記念法要

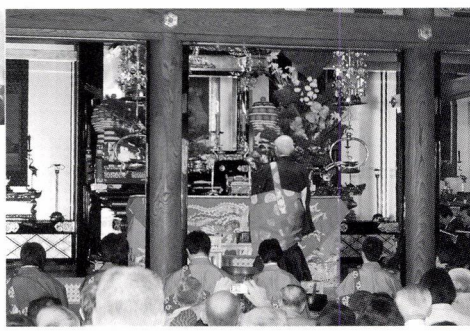




居多の海を望んで参拝式が行われた



光源寺において八百年法要が行われた







物産の販売



保育園児によるアトラクション

親鸞聖人配流八百年の記念の一環として、五月二五・二六日の両日、上越市五智の光源寺を中心にして、真宗大谷派高田教区が主催する法要が営まれた。

日本海に夕闇迫る親鸞聖人上陸の地、居多ケ浜での参拝式、二六日は国府御坊と称される光源寺で真宗大谷派二十五世門主によって法要が営まれた。

大小合わせて十数台の観光バスに乗り込んだ参拝者は、県内はもとより遠く青森・北海道、名古屋、京都の岡崎などから訪れたが、終了後、聖人の「思惟」を育んだこのまちを、ほとんど散策することもなく、そのままバスに乗り込み帰途に着いた。



高橋達太

水戸口を開けて港に春を迎えた人



保倉川右岸に並ぶ艀
岸壁にはすげ笠をかぶった大勢の女子衆の姿が見える
右下の写真は艀の曳き船謙信丸の進水。船の後方に「高崎の松原」が見える



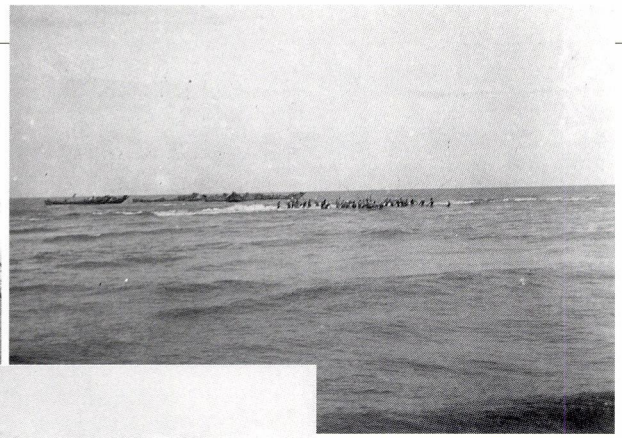
生い立ち

板倉区南中島（旧板倉町）のほぼ中央に高橋家跡がある。高橋達太は、この地で慶応三年（一八六七）八月十二日、父完太、母婦佐の長子として誕生する。父の完太は、床屋をしていた「南の高橋」（完太の本家）の七十郎が急逝したので、この跡を継いで村を統括し、やがて戸長や板倉村会議員を歴任している。達太もまた本家の嗣子が早逝したため、家を弟に継がせ、自分は「南の高橋」家へ入った。

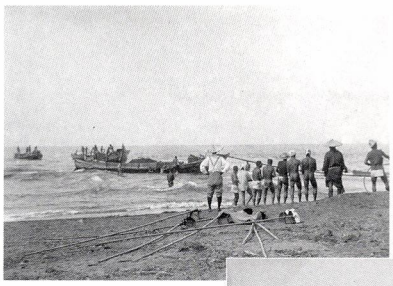
その道をはさんで向かいには「北の高橋」があり、「高田新聞」創業の一人であり社長を務めた、達太より七歳年長の高橋文質（ぶんしつ）がいる。文質は改進党系政治家として、県議から衆議院議員を歴任している。

この文質の衆議院議員の後継者となったのが、戸狩村（板倉区）出身で、高橋家とは縁戚関係にある実業之日本社社長の増田義一である。

本稿は、久保田好郎元上越市史編纂室長が他誌のために執筆したものに加筆したものです。



海中に点々と見えるのは
ジョレンで浅瀬を浚渫する
人たち
撮影の大正９年９月は干ば
つで荒川(関川)が渇水して
河口を閉塞し艀の入港がで
きなくなった



浅瀬をぬって艀を曳
き入れる
手前にジョレンが置
かれている



艀の人夫を指揮する艀会社小出専務
左の写真はようやく河口に入る艀



若き総代

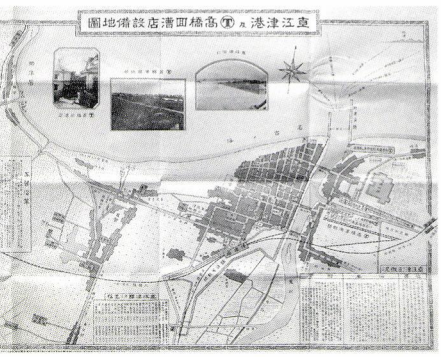
達太は高橋家の当主として、若くして中嶋村の総代となり、重立ち衆の先頭に立って村をまとめた。

明治十七年（一八八四）十月、隣村の広島村（現妙高市）との間に起きた「穀物窃取告訴事件」では、わずか十七歳で原告人として活躍している。また、明治二一年には、川西郷（南中島・下米沢―小石川・向広島）の現西川原橋の位置に橋を架けることに尽力した。橋が架かって児童の通学が非常に便利になったため、地元ではこの橋を「学校橋」と呼んでいた。このほか数々の事業を進めたが、いずれも地域のために努力したものであった。

高橋回漕店を創業

明治三二年、家業を弟の秀二に委ね、直江津港を拠点に日本郵船の代理店として廻船業に進出した。主に北海道の物産を扱っていたが、日本郵船の日本海定期航路の廃止などもあって、当初は経営も思うにまかせず、村一番の大地主も田地を売り尽くし、分家の家まで売って経営資金に当てるありさまであったといわれている。

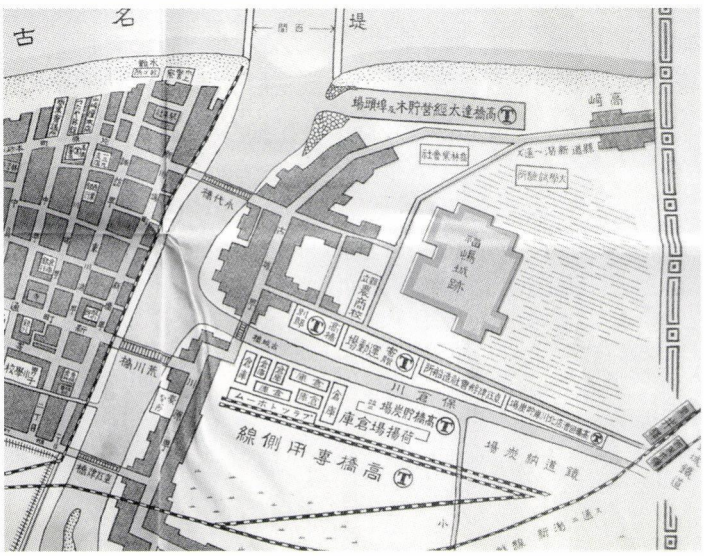
しかし、この経営難の一つに、青函連絡船の就航で、船舶による貨物輸送が大幅に減少したことがある。これは高橋回漕店のみならず、直江津の海運業者に大きな打撃を与えている。







上　沖合いに碇泊して荷役を待つ
下　保倉川左岸の専用線、手前は小町川



「直江津港及高橋回漕店設備地図」（下は部分）

そのなかで、高橋回漕店を飛躍させたのが、三井物産石炭部から荷役を請け負った北海道炭の取り扱いであった。

そのときのことを荻野惣次郎（いかや旅館主人・現ホテルセンチュリーイカヤ）が、

「大正三年ころに、高橋達太が三井物産の石炭を扱うことになりましてね。……荒川は冬になると砂が海から上がってきて、水戸口をふさぐんです。それをジョレンでもってかき出して水戸口をあけると、高橋（達太）さんが、三井へ荷役ができると連絡して石炭船が来たものです」（「古老が語る直江津の昔」より）

と語っている。

直江津港は大型船舶の接岸できる埠頭がなく、沖に停泊した貨物船から艀で陸揚げする沖荷役であった。石炭を満載した艀が小蒸気船に曳かれて、貯炭場で陸揚げする様は壮観であったと伝えられている。艀からの陸揚げは、女子衆と呼ばれる女性で、背負ったたがらに石炭を入れて、艀から陸に渡した細い板をたくみに渡って運ぶのである。

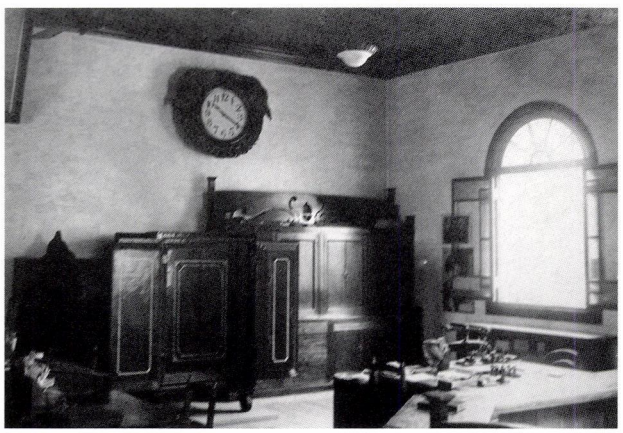
保倉川河口左岸の貯炭場には鉄道専用側線が敷設され、工場の原料あるいは燃料用、鉄道省用炭納入荷役請負で事業を拡大し、昭和十三年には取扱量が十七万トンにも達した。

話は前後するが、大正十二年に作成された「直江津港及高橋回漕店設備地図」を見ると、保倉川河口の両岸、通称ドック（現在の佐渡汽船発着場から住友金属直江津正門周辺にかけての港は、その当時の面影をかすかに残している）と言われた所は、ほとんど高橋回漕店の石炭荷揚げ場になっている。



人物像は滝川美堂作の沖仲仕の頭





直江津銀行の建物を移築した社屋
上　シンボルのライオン像も見える
下　当時とほとんど変わらない現在の屋内

高橋達太は、このような事業拡大ばかりではなく、零細な港湾運送業者を集約し、自らの会社も吸収させて新会社を設立している。また、直江津の回漕業には不可欠な艀会社の三社をまとめて直江津艀荷役組合を設立させ、高橋達太はそれぞれの会社に出資するなど、地域経済の発展に寄与している。

地域のために

このような事業の発展にともない、達太は直江津商工会議所議員に推され、さらに大正十二年（一九二三）には県会議員に当選する。

こうして実業界から政界にも大いに活躍したが、昭和九年（一九三四）四月二十七日、療養先の東京の病院で糖尿病の悪化のために、享年六六歳の生涯を閉じた。

「高達さん」「達太さん」と、まちの人に親しまれた高橋達太の棺の到着に当たって、直江津駅ではホームに提灯を掲げて迎えたといわれている。

達太の墓は直江津の泉蔵院にあり、「高橋達太之墓」の書は、犬養内閣で外務大臣を務めた芳澤謙吉の手になるものである。

高橋家と芳澤家とは縁戚関係にあり、謙吉の父良襄は直江津銀行の頭取で、直江津銀行の倒産の全ての責任を取った人である。

後に「ライオンの家」と言われるようになる高橋回漕店の社屋は、達太が買い取った直江津銀行の建物である。

高橋達太が直江津地域の人々に大きな思い出を残したのは、保倉川右岸の貯炭場、三七〇〇坪（二一九・二五㎡）を農商学校のグラウンド用地として寄附したことであろう。

このグラウンドは農商学校の生徒だけではなく、直江津から高田中学へ通学する生徒の親睦団体「直江津健児クラブ」の野球練習など広く開放された。

また、学校の遠足で古城の高橋邸の庭で遊んだという思い出を持つ人も多い。

■写真資料　上越市公文書館準備室・高橋回漕店文書
■参　考　高達倉庫有限会社資料

文学の旅

川原町

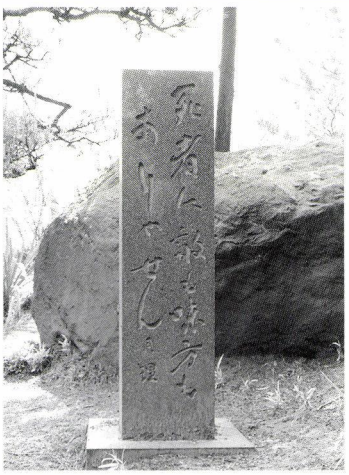
かわらまち　上越市

貝になった男
直江津捕虜収容所事件

上坂冬子

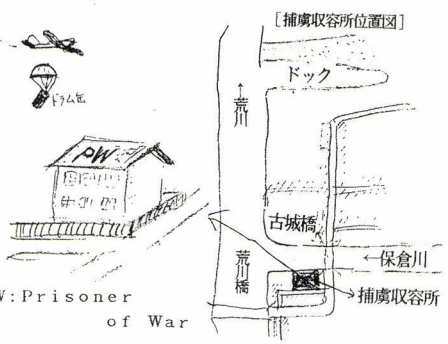


平和記念公園
飛天像（岡本銕二作・上越市五智出身）の後ろの建物は展示館
手前に碑が三つ建てられている



「死者に敵も味方もありゃせん」と捕虜を手あつく弔った住職の言葉が、「記念碑を建てる会」によって覚信寺境内に建てられた

八木登美男が描いた収容所のイメージ図

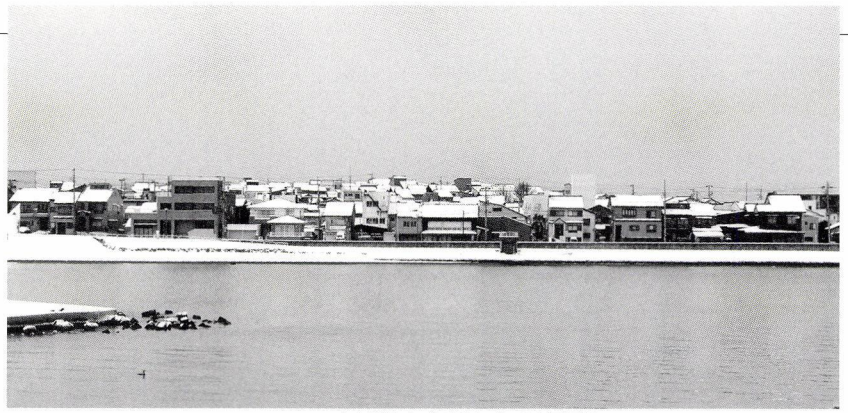


古城橋のふもとに捕虜収容所があった。毎朝その捕虜達が二列縦隊で働きに出かけて行くのである。そして月に一回くらい、月夜などに全員集合して楽器に合わせて歌を合唱している時もあった。そのメロデーが子供心にも何となく哀調をおびていた。

戦後はがらりと変わった。かつての捕虜達が収容所の窓から道路に投げるチューインガムに、会社帰りの大人達がわれ先にと群がって拾うのである。（「思い出の川原町」少年時代・井部時雄）

＊

終戦後のある日、飛行機が飛んできた。収容所の屋根の上にはＰＷと大きく書いて合図を送っていた。そのうちに空から落下傘を付けたドラム缶を投下した。慰問品を投下したのだった。その一部が古城の民家に落ちて屋根を壊し障害者を出した。どこに落ちても危険な話であるが、食べ物がなく栄養失調になっている捕虜たちに一刻も早く慰問品を届けようとしたのであろう。それにしても無謀な投下であった。（「百歳バチャとそのふるさと」八木登美男）



古城橋から望む冬の直江津

東京捕虜収容所第四分所、通称直江津捕虜収容所は昭和十七年に設置された。この収容所で、十八年から十九年にかけて六十名ものオーストラリア軍捕虜が死亡した。全国の収容所のなかでも異例の死者数であった。そして戦後、いわゆるBC級戦犯として、八名の直江津捕虜収容所員が死刑に処せられた。

昭和五五年の晩春の日のある夜、「直江津捕虜収容所事件」を調べるために直江津駅に降り立った一人の女性がいる。その女性とは、「いつでしたか、若い娘さんが捕虜収容所を調べに、うちに泊まって、五智の火葬場まで調べて行きましたよ」と、いかやの老主人が語っていた「若い娘さん」、作家上坂冬子である。（当時、惣次郎九十・冬子五十歳）

上坂冬子は、

……国内の収容所としては、処刑された人の数が最も多い。いったい何があったというのだろう。さらにもうひとつ、八人の部下が絞首刑になったというのに収容所長は終身刑で、十二年の獄中生活を送ったあと無事に家族のもとに戻っている。陸軍中尉だった所長はどんな人で、なぜ生き長らえることができたのか。……いまさら究明したところで事態が変わるわけでなし、誰もが触れたくないからこそ、そっと戦後史の片隅に埋めるようにしてきた話を、今頃になって掘りおこすことへのためらいはあったが、私には戦争が引きおこした明暗に理屈ぬきの執着がある。とりあえず現地にいってみよう……。

と、「謎解きの旅」に出たのである。

彼女の旅は、遺族や関係者からの丹念な聞き書きと綿密な調査を重ねている。あとがきで「材料を寝かせた理由は、取材した事実の重みに私自身が圧倒されたためといえようか」と述べているとおり、五年を経て昭和六一年「新潟日報」に連載後、『貝になった男 直江津捕虜収容所事件』として上梓された。

取材は、捕虜の遺骨を引き取って供養した覚真寺住職藤原円理の人柄、ドラム缶の落下で片足を失った少女、収容所で捕虜の書簡の検閲にあたった小田嶽夫の、作家らしい冷静かつ人間味あふれる視点、嶽夫が何通も検閲したラヴレターの主、T・Mリーと直江津高校との交流、リーが日本で見せる顔と本国で旧捕虜に囲まれて見せた表情の違いなど、周辺まで丹念に追っている。

「旅」は元所長の軍人としての数奇な運命と、「貝になった男」の壮絶な後半生を取材して終わる。

一人の元捕虜の証言が引き起した「直江津捕虜収容所事件」は、遺族への思わぬ差別を生む。しかし、一方で「きのどくに」という思いが交錯して、まちの人は何事も無かったかのように口を閉ざし、声をあげて語る人はいなかった。

この「事件」の真実を明るみに出した『貝になった男』は、大きな反響を呼んだ。

いま、捕虜収容所跡の「平和記念公園」には、全く別な三つの「碑」と飛天の像が建っている。碑の建設については、上坂の批判するところとなり、マスコミで話題となった。しかし、上坂の「戦争が引きおこした明暗」に迫る真摯な取材がなかったら、平和記念公園は実現しなかったかもしれない。

参考
巣鴨プリズン13号鉄扉　上坂冬子／歴史はねじまげられない　上坂冬子／文学風景への旅　考古堂／高陽草子　小田嶽夫／太平洋にかける橋　捕虜収容所の悲劇を越えて　直江津捕虜収容所の平和友好記念碑を建てる会編
小田嶽夫　高田出身　第三回芥川賞受賞

講演

可能性を求めて

高井 進
陶芸家

●本稿は上越なおえつ信金倶楽部総会における講演を編集部において抄録したものです。

はじめに

妙高焼きの高井です。三九歳で脱サラして窯を開きまして、ちょうど三十年になります。

節目というわけではありませんが、親鸞聖人上陸八百年ということで、二十年以前からずっと継続して実験してきた「砂の器」のことからお話したいと思います。

御当地ソングなんて言う人もいますが、各地の砂とか山土、海や川の砂とかを普段の仕事とは別に、繰り返し焼いて実験してきました。

砂が焼き物になるなんて、誰も思っていないことにチャレンジしてみたわけです。

動機は、妙高の溶岩から始まって、第一電工や中電のマンガン、ステンレスのスラグ、三菱化成から出た産業廃棄物、会社の人は「副産物」と呼んでくれと言いますが、純度の高い副産物ですから、それぞれ味のあるいいものが出来ます。しかし本来の仕事とは違うので、参考資料程度にやってきたわけです。

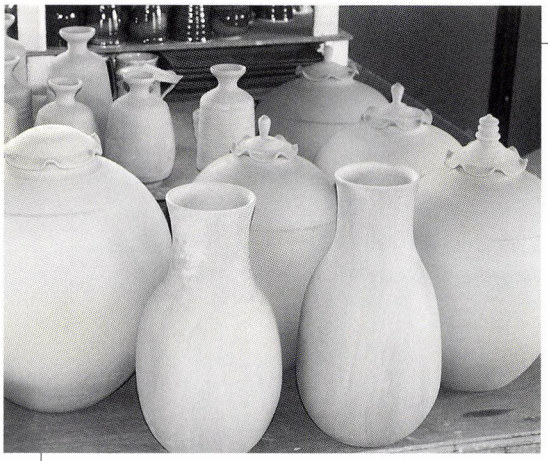
居多の浜の砂を焼く

たまたま親鸞聖人上陸八百年ということで、もう一度、居多の浜の砂を焼いてみたわけです。最初は、新井や妙高の粘土化した海の砂と、そのままの海の砂をブレンドしていましたが、砂そのものが溶けるかどうかもやってみました。秋田県の象潟から鳥取砂丘まで四五か所くらい実験してみましたが、溶けるようで溶けない。岩室の間瀬海岸の砂は海底火山のマグマだといわれていて砂鉄のようですが、磁石でもくっつかない。刷毛で塗ると溶



陶板を製作中の高井さん




作品への出番を待つ

けてしまう。長次郎の楽焼のような非常に不思議なものができてくる。佐渡の宿根木も海底火山ではないかといわれていて、やはり溶けてしまう。

ところが居多の浜の場合は、砂そのものが溶けてしまいます。それが能生の鬼舞から親不知、氷見に至るとほとんど溶けません。十日もすると砂が弾けて飛び出し、穴が開いてしまうから焼き物にならない。

居多ケ浜に関して言えば、もっと分からないことがありまして、「波動」と呼んでいるのですが、我々には解明できない天界の摩訶不思議な世界らしいです。味が良くなってまろやかになる。ストレートコーヒーが飲めない人でも飲める。

これも私が発見したわけではなく、長岡の個展でお茶を点ててもらったとき、長岡で一番お茶に詳しい先生が「美味しい、お茶がまろやかだ」とおっしゃったと、お茶を点てた先生が教えてくださった。もし、これを聞き流していたら、今日の話題は違っていたでしょう。

砂が焼き物になるなんて、おそらく世界中に無いと思います。これを地元に「形」として残せないかと思って、この技術をすべて公開することにしました。上越にプロでやっている人が約七人、アマチュアは何人もいます。そういう人に技術を全部公開して、五十年、百年の後に残せるシステムを作らなければいけないなと思っています。

親鸞聖人の八五〇年、九百年のときに、みやげ物になるような……。何とか皆さんの力添えで、一般市民の人も参加して、将来に残していきたいと思います。これは私の夢でもあります。

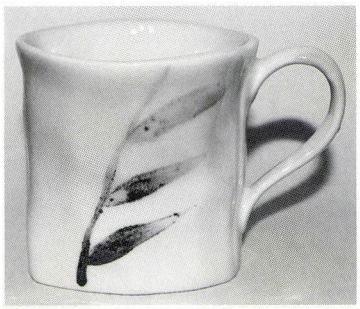
陶芸とは自分の「生きざま」を出す

陶芸家というのは、新しいものを創造して発表しての繰り返しだと思います。同じことを十年繰り返しやったら、どんな人でもうまくなる。だけどそれじゃ陶芸家じゃない。そんな甘いものじゃありません、もっともっと新しい物を引っ張り出して、生きざまを出してこないと、芸術というものは理解されないし、誰も受け止めてくれません。それは焼き物に限らず厳しさがあると思います。誉められたら全部OKではない。厳しさや責任を感じなければいけないこともある。そういうことが分からないでいると、思いあがった作品になってきますし、見破られます。私の場合、八割方苦しんでいるほうが多いような気がしますが、プロですから、苦しみながら生きていくということです。

例えば、南宋の宮廷が一番愛した雨過天晴という非常に明るい青磁では、完全無欠でなくてはいけない。これを三十年追求しているのですが、私の師匠の三浦小平二のようなわけにいかない。弟子だから、聞けば同じもの

が出来てしまう。しかし、そういう安易なものじゃない。先輩たちが苦しんで死ぬような思いをして、名を成してきたわけですから、真似して威張ったってしょうがない。自分の世界を作らなければいけない。例えば「妙高青磁」なんて言われるようになるには、十年以上かかるわけですよ。

昔は全部国内で間に合った原料が今はもう無い。同じ長石でも原産国でぜんぜん違います。青磁の温度は一、二度の世界です。低くても高くてもだめ。ですから輸入品になると、わけが分からなくなって、また一から調合をやり直さなければならない。三十年目にして、また苦しんでいる。原点からやり直しです。いつになっても追っかけっこですが、自分の理想がありますから、まあ、常に堪えて実験していくしかないですね。



片葉の葦コーヒーカップ

社会で学ぶものが作品に反映

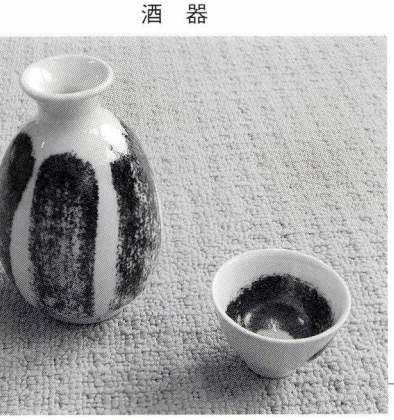
中国には年に最低でも一回、多い時は二度、景徳鎮で仕事をしています、日本人は誰もいません。窯が大体一万、分業制で働いている人は四十万人くらいいる。縁あって、窯場で人間国宝という人と知り合い、作るのを許可されて持ち帰ることも許されました。その代わり技術交流で、日本人が好むものを教えなければいけない。

中国物産展などで古いように見えるものは、二百年、三百年くらい前のコピーを日本に持ってきているのです。景徳鎮の土は有田なんかと違って非常にもろく柔らかいので、土の中に埋めておくと古びて見えるようになる。しかし、そういうコピーじゃだめだってことに気がつきはじめました。先方と懇談する時間があって、コピーじゃなくて現代の日本のありように合わせなければうまく行かないという話をしました。

ところが日本人好みの物を技術指導しても下の方に全然伝えられない。自分の財産は自分だけ。職人たちに教えていこうという目的を分かってもらうのに三年かかりました。ところがこんどは、北京から上海にかけて、ちょっとした有名な店に、私の教えたものがザーッと並んでいる。さらに全然関係ない工場がそのコピーを作るというように、非常に展開が早い。

景徳鎮は大変な分業制で細かい仕事をやっています。そこで白磁にエアーブラシの技法を使ってたら、人間国

酒器





居多ヶ浜「流砂」の作品を前に

このようなことを感じとり、「砂の器」のような、いうなれば発想の転換とか柔軟な発想を身に付けたのは、東芝や住友商事の子会社で会社勤めをしたおかげだと思います。そこで、人に使われ使ってきたことで、自分や相手の心のありよう、思いやりとか、自分に対する厳しさが身についたのだと思います。

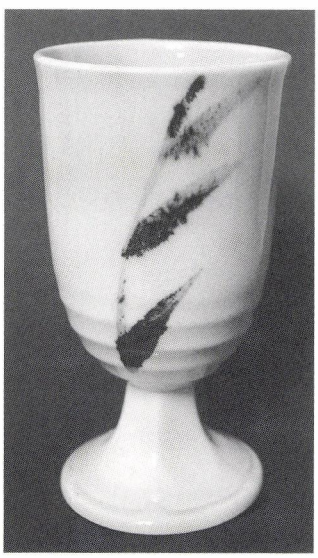
使い手のための作品

東京の方では景気がいいようなこと言っていますが、我々の世界は厳しいです。上越のみならず県内では飯が食えない。しかし、貧しいからといって貧しいもの作っちゃだめなんです。

最近、定年になってから始めたとか、勤めているうちに覚えてプロっぽくなっちゃったという人が増えています。その人達の作品は比較的安い。良い作品が手ごろな値段で皆さんの手に渡る。これはいいなあと思うけど、何かが欠けている。

宝に「こういう技術を中国人に見せちゃいけません」と叱られました。しかし、見に来ていた若い連中がやってしまった。五年ほど前に行ったとき、「高井さんの作品がいっぱいあるね」と言う。見たらほとんど私のコピーです。やることがすばやい。そういうコピーがたくさんあると、カッときますが、日中友好が壊れるから、「景徳鎮の千年の歴史に新たな風を送るんだと思えばいい」と割り切れば腹が立たない。

景徳鎮とは別に、一年に一、二回、世界遺産とかではなく、人間の生きざまというようなものを見たいと思って旅に出ます。格差なんて言いますが、東南アジアへ行くと、そんな言葉では表現できない底辺の中で生きている人達がいる。朝は十六円のラーメン食って済ませるとか、それも食えない人もいる。そういうレベルの間に入ってきた時の心のありようというのでしょうか、大抵のことは許されるようになる。それがただちに作品の形に反映出来るわけではありませんが、一つの心の広がりが、形になってくることも自分では感じています。



片葉の葦ワイングラス

つまり、作り手の生活レベルの発想からは、作品に沢庵か芋の煮っころがししか乗らない。その作品を買うお客さんは、ひょっとしたら、もっと美味しいものを食べ、何か美味しい物をのっけようかと思っているかも知れない、ということが分からなければならない。

美味しい物を乗せてもらうには、自分が美味しいものを食べる。高いレベルの人が買ってくれると思えば、感謝とともにもっと志ある物を作らなければならない。

出張に行って一番安いビジネスホテルに泊って一番安い焼鳥屋へ行く。少なくとも焼き物屋になったら一流ホテルに泊まり、一番美味いもの食べ、美味いもの食っている人達がどんな人か見て来ないと、そういう人達が望む物は分かりません。

しかし、物を作るということは、そのような志も大事だけど、高く売っちゃいけない。いろんな人に使ってもらい、どこの家庭にもありながら、あの人の作ったものだから美味しい物を乗っけようという気持に、使い手から思ってもらえるような作品でなければならない。

県内でプロは百人以上いるでしょう。まだまだ生まれてきます。だけど、今お話したように、ただ物を作るというだけでは、「ただの焼き物屋」なんです。そのあたりが、皆さんはどうしても掴みきれていない。



作家が地域社会でやるべきこと

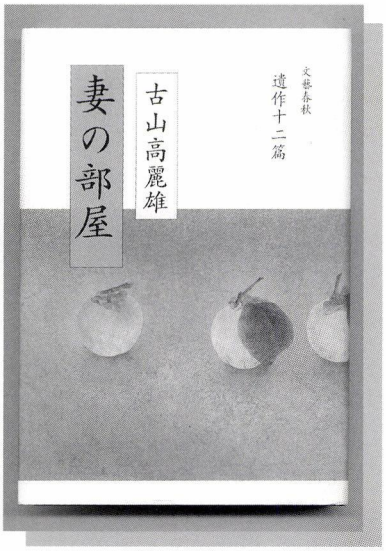
先ほどの「砂の器」にもどりますが、砂だけで焼いた物が今まであっただろうか、これがこの土地で生まれるということが、おもしろいと思うのです。私の本来の仕事ではなかったのですが、だけどこれを若い人たちにつなげて行きたいですね。

五十年後に、みやげ物が無いなんてことが無いように、五十年たたなくてもいい、今年でも来年でも、全国のどこかに上越市を売り込みたい。そういう夢みたいな話もしてもらいたい。

ただこれは、私一人でやるのではなく、上越の陶芸家あるいはそれに続く人たちに続けてもらいたい。作家として独自でやっている仕事は別にして、こういうことはみんなの物だと思っていますから。

略歴　１９３８年　妙高市（旧妙高高原町）に生まれる／１９７７年　妙高焼として開窯／人間国宝三浦小平二に師事
現在　日本工芸会正会員、中国江西省景徳鎮「万里窯」設立技術顧問、日本中国文化交流会会員、新潟県美術家連盟会員、上越陶芸協会会長、久比岐野陶芸展会長、高田文化協会副会長
住所　上越市中郷区江端

■読書びと



妻の部屋

古山高麗雄著

文藝春秋刊
二一九〇円（本体）

家の建替えで書架を整理するとなつかしい雑誌に巡り合った。『季刊藝術』の創刊号は一九六七年春に世に送られ、B5判、二二四頁で駒井哲郎、朝倉摂のカットと粟津潔の表紙デザインで飾られた誠に趣味の良い雑誌であった。

発売元に講談社を選びながら、文学の江藤淳、音楽が遠山一行、美術に高階秀爾、という三人の仲間が〈編輯同人〉に名を連ね、ジャンルを横断して批評の復権を図り、予定通り五十号まで直球勝負を継続した。江藤の『一族再会』や高階の『日本近代美術史論』など、〈近代日本〉の原像を私に結ばせた優れた仕事がそこで展開された。そして『季刊藝術』に〈雑誌作りのアルチザン〉として四人目の同人に選ばれたのが当時四十七歳の古山高麗雄（ふるやまこまお）である。

古山は一九二〇年、朝鮮新義州で開業医の家に生まれ、戦時に放蕩生活（のち安岡章太郎が『悪い仲間』に書く）のあげく旧制三高文科を中退し入営。南方に送られビルマ、中国雲南省、カンボジア、ヴェトナム、と移動、俘虜収容所勤務のため戦犯容疑者として禁錮八カ月の判決を受けるも、未決通算により釈放され、半年を日本人キャンプで暮らしたのち復員する。戦後は河出書房ほか出版社をわたりあるいた。

編輯者がなぜ同人に、と中村光夫に問われた江藤淳が、作家になれば差し障りはなかろうと古山の小説を掲載し、結果七〇年に『プレオー8（ユイット）の夜明け』でA賞をとる。私小説作家として戦争という極限の体験を追憶する手法に、「苦しいときは笑うしかない、という井伏（鱒二）流でいく」と思い定めた古山。苦いユーモアと平明な文体を交え、玉砕に近い激戦地の体験を紡ぎ続けて、九四年に『セミの追憶』で川端康成文学賞、そして二〇〇〇年にはようやく完成した『断作戦』『龍陵会戦』『フーコン戦記』の長編三部作により菊池寛賞を受賞した。

遺作十二篇、と副題された『妻の部屋』は古山の死の半年後、二〇〇二年秋に上梓された。

前年に『二十三の戦争短編小説』（文藝春秋）で、処女作『墓地で』から佳品『真吾の恋人』までのアンソロジーを再度世に問うた古山。

その三十年の軌跡をうけた『妻の部屋』は、『来し方ばかり』ほかの〈真吾物〉の続編群と、北朝鮮と北ビルマへの旅行記、そして九九年にこの世を去った妻明子に纏わる連作より成っている。誰もいない自宅で急逝した妻、残された夫は妻が死んだ布団に寝転がり追憶に耽る―。十五年間書き続けられた夫人の日記や遺書には身勝手な夫への非難、だらしなさと傲慢への嫌悪などが容赦なく綴られる。そしてそれも含めて古山は、大半は別居のような暮らしだった夫婦の五十年を愛惜こめて振りかえったり、江藤淳の妻を追っての自死にこころ騒いだりする。

その後作家は、孤独死を覚悟した独居老人として生活し、様々に書き記し自ら予感したように、誰にも知られることなく幽明界を異にした。

敗戦記念日の夏を前に、非戦の条項を的に憲法談義が喧しい。現役兵だった人は総て八十歳を越える。戦争の現実だけでなく、その時代を体験した男女のその後の生のありように想いを向けるとき、この偏屈親父と彼の家族の来し方は忘れてはならない営みの例であるとおもう。

同時に、古山高麗雄の晩年を照射し相対する言葉と暮らしとして、島尾敏雄と、奄美の島で特攻隊長だった夫の死から二十年の服喪の後に、今春孤独死した妻ミホの聖俗愛憎の戦後を、そして古山と同年の私小説作家、庄野潤三夫妻に恩寵のように訪れた至福の晩年を思い出す。

我が福永武彦のように絶版多く、図書館にも開架少ない不遇な作家のいる一方、古山の地味な仕事は、文庫で次世代の読み手に引き継がれている。古山古兵殿もって瞑すべし。（鍼）

建物さんぽ　その六

ゆるぎない暮らしの美徳

旧三和村の神田を訪れて、「うるわしい」という言葉を思い出しました。

今朝から薄暗くなったかと思うと、俄か雨。丘陵を廻るようにして坂道を下ると、木立の先のやや低い土地に、田んぼと畑が見える。雲が晴れれば、水を張った田の面に初夏の陽射しがきらきら。山裾には古墳群もあるし、農業の溜池も多い。有名な地酒「雪中梅」の蔵もあります。大昔から水田稲作に都合のよい土地柄で、豊かな自然と人々の暮らしが破綻なく寄り添っている。そんな風景がうるわしいのでしょう。

林富永邸に着く頃には五月晴れ。お庭の苔が雨に洗われて、ひときわ鮮やかに緑が広がる庭先で、穏やかな笑顔のご夫妻が迎えてくださいました。

南向きの玄関がある居間は、高い天井に太い欅の梁が交差して、何事にも動じない確かさで、「枠の内」を支えています。庭を眺めると、視界は軒先線に区切られた横長の額縁から広がります。西向きのお座敷からは右手に山裾が連なり、杉の大木と燈篭のシルエットの向こうに、明るい水田が見えます。野生の栗鼠が駆け抜け、他の動物も色々と…。

昔の位置のままでリフォームされた台所には大きな窓があり、庭の中で料理や洗い物をしているみたい。眺めのいい台所は、家事を楽しくしてくれるものです。二つのかまども、石の水盤も残されていて、三世代の家族とお手伝いを含めて、十人余りの所帯を賄ってきました。

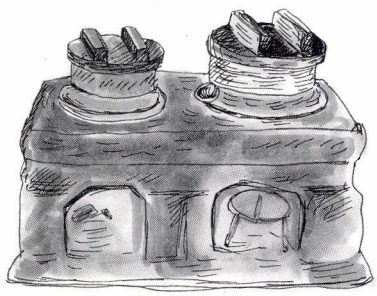
林富永家の七代目にあたるご主人は魚類の研究者で、長らく松本にお住まいでした。九州生まれの奥様は、越後の雪と風土に馴染まれてきたそうです。もう一人の住人、猫のダブちゃん（十九歳）も、松本から一緒に越してきたのですが、ずっとここに棲みついているかのごとく、柱で爪とぎなどはしません。この建物は、新しい住人をも長年の友として受け容れてくれるのかしら。手作りのお菓子と漬物をいただきながら、私たちも、長い時間と懐の深い空間にすっかり溶け込んでいました。

居間に掛けられた年代物の振り子時計。ずっと動いていなかったのですが、最近、古時計を修理してくれる方に直していただいたとのこと。時計職人が良質の部品を吟味して、真面目に作った柱時計は、時を経ても、職人気質で修理すれば息を吹き返し、昔のように時を刻んでくれます。

富永さんのお住まいも、この時計と同じなのです。明治の大工さんは、派手ではないけれど良質の木材を選び、丁寧に真面目な仕事をしました。だから百二十年以上たっても、人が住むことで、ゆるぎなく時を刻んでいきます。ご夫妻が不在の間も頻繁に帰られては手入れをされていたのですが、建物は少し淋しかったことでしょう。五年前に戻られて、日々の暮らしが始まり「質実剛健」の建物に、優しい家人の気配が甦り

ました。村の人々からも「屋敷にあかりが灯ってうれしい」と言われるそうです。
建物だけでなく、地域の人々も幸せにしてくれる。「文化財」とは、このようなものであってほしい、と感じました。





「林富永邸」
富永家は旧中頸城郡神田村で代々庄屋を務めた。林富永家もその一族であり、医者を多く輩出してきた。明治十六年建築の現住居は、小高い土地に建てられており、庭園に囲まれた広い敷地に萱葺きの母屋と米蔵が残されている。（上越市文化財）

「枠の内」
建物の中心部を太い差物（梁・胴差・差鴨居などの横架材）と柱で構成し（枠の内）、その周囲（庇空間）と一体の大屋根で覆う。北陸地方の民家に特徴的な構法で、枠の内から突出した部分は「中門」という。

文　せきゆうこ
画　ひぐちきみよ

上越信用金庫　上越産業振興研究所レポート

直江津知り隊　朝市を訪ねて

山本和子研究員

直江津に住みながら、知っているようで知らない直江津。まちのことを知るためには歩くのが一番。さっそく駅から歩いてみることにしました。

「互の市」

四月、直江津駅前を通る小学生の顔ぶれの中にピカピカの一年生が仲間入り。元気いっぱいに登校する姿が見える頃、いよいよ待ちに待った「互の市」の開催です。

私が訪れたこの日はお天気に恵まれ、多くの買い物客が買い物とおしゃべりを楽しみに集まっていました。なかには、通勤途中の男性が昼食用なのでしょうか、お惣菜を買いに立ち寄っていました。「互の市」を楽しみに待っていた顔ぶれは、近くに住む人や常連の方が多く、売り手、買い手、買い物客同士和気あいあいおしゃべりが続きます。その中に自然ととけこむことができ、いつの間にか私も仲間入りして楽しい時間を過ごしました。

互の市を毎回楽しみに訪れている主婦は「互の市は、他へ行くよりも安くて新鮮なのがいいよ」と教えてくれました。



「互の市」の始まり

直江津駅前の若手でつくった「直江津まちなか市座」を中心とし、まちおこしの一環として直江津駅前の空き地に野菜の直売、特産品販売所として平成十四年九月十五日から毎月「五」のつく日に朝市「互の市」が開催されるようになりました。二年めからは、「〇と五」のつく日の開催になっています。「互の市」の会場には木造の小屋が十棟あり、小屋を借りて販売することができます。なかには車で乗り込んで販売をしている人もいます。

地産地消

出店者は地元直江津から安塚あたり迄、地元がほとんどです。地元で取れた農産物を地元で消費する自家製の農作物や食品が売られています。どれも作り手の顔が見えるため、とても安心な買い物ができます。「おすすめは？」と尋ねると、どれも自慢の自信作「全部おすすめ」と返ってきました。



「どこよりも安く新鮮」を売るために、朝早くから加工品作り、農産物採りと目に見えない苦労もあるようですが、「ボケ防止になる」「生きがいになっている」など、楽しそうに話してくれました。「互の市ならではの楽しみ方」は、買い物をする会話を楽しむだけではなく、「出店してみる」のも楽しみ方のひとつになっているのだと感じました。



伝統ある朝市「三・八の市」の歴史

上越市には、明治以降に生鮮野菜の供給を目的として始められた朝市があります。高田の「二・七市」「四・九市」、直江津の「三・八市」です。市の開かれる日が市の呼び名になっています。

直江津の「三・八の市」は高田の「二・七の市」の次ぐ古い歴史を持つ市です。「三・八の市」（明治四四年三月認可）は、実業青年会が発起人となって地域の商売を盛んにするため、新橋区青物市場として始められました。太平洋戦争下、物資の欠乏と配給制により閉鎖されましたが、昭和二五年四月一日、直江津町の管理下で、新町通り（現在の中央二丁目）に復活すると、二百近い出店者で朝市が賑わうようになりました。しかし路上販売のために、自動車の増加による交通混雑の問題を抱えるようになり、昭和三六年に現在の中央三丁目に移転しました。

朝市の楽しみ方

「三・八の市」を歩いてみました。道の両側に店が並んでおり、歩いていくと海へ続いています。この日は六一店舗が出店しており、多くの買い物客が訪れているなか、近くの園児がお散歩に、小学生が総合学習の一環で特産品を探しに訪れていました。小学生は探検バックを持ち、お店の人に、

「これは何ですか？　何処で取れましたか？」

と尋ねていました。

「特産品は見つかった？」

と聞くと、

「あったよ」「とても勉強になる」「いろんなものがあって市は楽しい」

という返事が返ってきました。

三・八の市の出店者の多くは上越市の人ですが、なかには新潟市や妙高市、富山県など県外からも来ています。それだけに、地元で取れた多くの特産品以外に全国各地の特産品も売られています。

ギンバソウやサメの皮、はやとうりなど、季節により珍しい産物が発見できるのも朝市の楽しみ方のひとつです。切花、山菜、野菜、果物、海産物、衣類、陶器、日曜雑貨など、生活に必要なものがそろっていて、一店一店眺めていると時間が足りないくらいです。

朝市は戦中を除き、品物が足りなくなるほどの人出があったと言われていますが、自動車の普及やスーパーの出現で、生活に必要なものはいつでも手に入るようになり、昔のような買い物の客は減っています。

上越市と国際平和交流を続けているオーストラリアのカウラ市の中学生が直江津を訪れ、学校で交流をしている間に、引率の人達が三・八の市を訪れているのに出会いました。朝市の楽しみ方には、昔ながらの伝統的な朝市として、地元の人達が買い物をする場だけでなく、子供たちの学習の場や、地域外からも人を集める観光資源ともなっています。

朝市はスーパーとは違い、売り手作り手の顔が見えるため、安心して買い物ができます。また、食べ方や調理の仕方などを聞いたり、買い物客同士の会話を楽しんだり、知らない人とも会話ができてしまう、とても不思議な空間があります。車で移動することが多くなり歩くことが少なくなった今日、車を降りて地域を歩いてみると新しい発見ができます。

伝統的な「三・八市」と新しい形の「互の市」、形の違った朝市がある直江津のよさ、朝市の楽しさを発見することができました。

■参考「直江津町史」

アルバムの一枚

郷津駅

昭和四四年九月二九日、複線電化工事による路線の切り替え工事が終了し郷津駅が廃止されました。

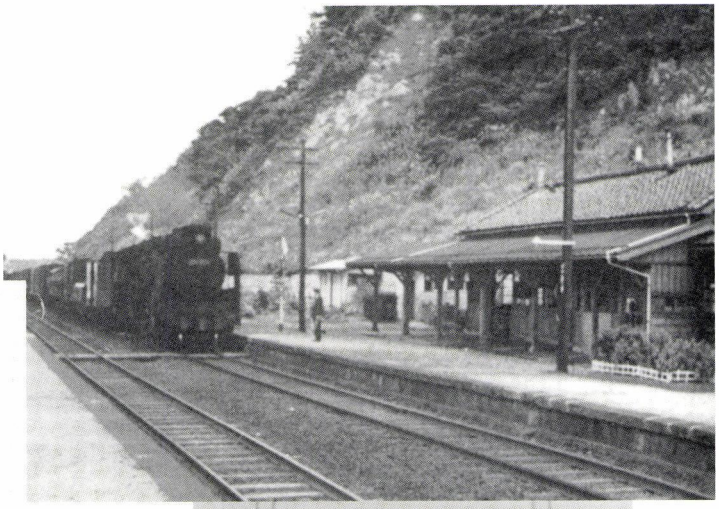
京阪地方と北陸を結ぶ鉄道は、地域間を結ぶ鉄道として各地で敷設されていましたが、明治二八年に米原・福井間の開通で「北陸線」という名称が生れました。

直江津でも、明治三九年に国営で富山へ向けて「富直線」の名称で敷設が開始され、四四年に直江津・名立間が開通しました。当時は信越線の支線としての位置づけでした。

北陸線は険峻なルートが多く、現在は北陸トンネルで通過する敦賀・今庄間は一〇〇〇分の二五という急勾配という難工事でした。また、親不知子知不知も大変な難所で、米原・直江津間が全通するのは、大正二年四月一日のことで、「北陸線」として一つに結ばれました。

郷津駅はそのまま海岸に出ることができるため、長野県などの県外の人達にとって、夏の海水浴の駅として思い出に残っているようです。

郷津駅跡は海洋フィシングセンター前の駐車場、線路敷きは国道8号に変わりました。



富山方面へ向う荷物列車



このあたりはフィッシングセンターの駐車場になっている





発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

■編集室から■

上越地域は、本当に自然環境に恵まれている。芽吹きころから新緑のころまで、親しい人の集まりで山野草の採れ具合が話題に上らないことはない。最近、知り合の酒宴に招かれたとき、今朝採れたばかりの山海の幸づくしという膳であった。まことに贅沢な一夜であった。

本誌四号で、南木均氏が関田山脈について述べた結びで「農山村が滅んで都市が栄えた例は、人類史上どこにもない」と指摘している。

里山の手入れが山野草を育み、豊かな土壌を伝って流れる雨水が海の魚介を育てる。梨平峠道を復元する人たちの作業も、山を守る一環であろうと思う。

第7巻3号　9月1日　発行予定

年間定期購読（4冊1920円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

季刊「直江の津」夏号
第七巻二号　通巻二十六号
発行日／平成十九年六月一日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二―一八
上越信栄社内
☎〇二五(五四五)〇二一〇二
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／(有)北越出版
責任者　佐藤和夫

内容・投稿などの問合せ先
北越出版
上越市国府三―九―五
〒九四二―〇〇八二
TEL〇二五(五四三)九七一五
FAX〇二五(五四三)二〇二五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊

直江の津

発行／平成十八年六月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／(有)北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／(株)桐朋・太田均

頒布価格／三〇〇円(送料一八〇円)